様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６３２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４３２０１０１

研究課題名（和文）第二言語ライティング研究の現代的課題と解決のための将来構想―東アジアからの発信―

研究課題名（英文）Future Frameworks for the Current Challenges and Solutions for Second Language Writing Research -- Voices from East Asia--

研究代表者
大井　恭子（Oi, Kyoko）

清泉女子大学・文学部・教授

研究者番号：７０１７６８１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本、韓国、台湾、香港という東アジアに位置する4か国がする英語ライティング教育に関して、アンケート調査によって実態を浮き彫りにし、そして互いが一堂に会することで実態を比較しあい、問題点などを共有し、今後の展望などに関して国際シンポジウムとして意見交換ができたことが一番の成果と言える。さらに、学習者コーパスを精査することにより、4か国・地域の学生の書く英語の諸相が明らかにされた。最終成果物として『EFL Writing in East Asia: Practice, Perception and Perspectives』を刊行し、多くの方と共有できたことで、この分野の進展につながった。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to investigate the conditions facing teachers of EFL writing in four countries/regions in Asia: Japan, South Korea, Hong Kong, and Taiwan. The main achievements of the project were as follows: we used surveys to investigate the current state of EFL writing; we also held two international symposia in order to share and compare ideas and findings and clarify common issues and challenges as well as future directions in the teaching and research of EFL writing. We also carried out a close analysis of a learner corpus, which illustrated the specific characteristics of the writing products of EFL learners in the four countries/regions. As a final product we published the book “EFL Writing in East Asia: Practice, Perception and Perspectives,” in which we share the fruits of the research and developments in this field with other teachers and researchers.

研究分野：英語教育

キーワード：EFL writing　学習者コーパス　ライティング課題　n-gram　国際調査

１．研究開始当初の背景

政治，経済，文化などの活動が地球規模で迅速に展開するグローバル社会では，個人が地球市民の一員として情報を発信し，異なる文化・価値観を受け止める中で連帯・共働し，新しい価値の創造に関与することが求められている．このように加速化するグローバル社会において，高等教育，とりわけ学士課程教育では，「知識伝授型 (How to provide instruction)」から「知識創出型 (How to produce learning)」を重視する教育への転換が求められ，情報を収集して様々な「知」を組み合わせ，自分のビジョンを持ち，他者に発信するといった新たな能力を養うことが急務の課題となっている（Barr & Tagg, 1995; 三浦，2014）.

こうした新たな要請のもと，重要な要素として位置づけられているのは，分野共通に求められる「基礎的・汎用的技能」である．これは，「課題解決のために必要な情報を収集・分析し（受信能力），調査の結果を論理的な文章で相手に伝えられる力（発信能力）」と言い換えることもできる．とりわけ，ほとんど全ての学問分野において最新の研究成果は英語で発信されるようになっている昨今，「英語の文献を読み，英語で発信する力」の重要性は，以前にも増して高まってきている．つまり，「英語で書くことによる『発信力』の育成」が，高等教育機関における英語教育が担うべき役割として社会から期待されているということである.

それでは，こうした加速化する新たな汎用的能力育成へのニーズに対応するために，英語を外国語として（English as a Foreign Language, EFL）学ぶ国の高等教育では「英語で書く力」の育成に向けてどのような取組がなされてきているのだろうか．英語教育は，これまで，英語を第二外国語として（English as a Second Language, ESL）学ぶ環境で得られたデータに基づいて発展してきた傾向があり，EFL 環境での実態の報告は，ESL に比べて十分ではないことが指摘されている（Ortega, 2004）．また，EFL の中でも特に東アジアの EFL 教育，とりわけライティング教育に関する実態調査はほとんど実施されてきていない現状がある．こうした現状を受け，本研究は，東アジア諸国において共通する「外国語としての英語ライティング教育」の実態を把握し，課題を明らかにした上で，同地域において必要とされる英語ライティング教育のあり方を提案することを目的として実施された.

２．研究の目的

本研究においては,大きく分けて二つのグループにより研究を遂行した．一つは「実態調査班」であり，もう一つは「コーパス班」である.

(1)実態調査班

実態調査班が実施した「学生アンケート」では大きく次の 3 つの研究課題を設定した.

１．　高校の英語授業で，どんな英文をどのくらいの頻度で書いているか.

2.　大学の英語授業で，どんな英文をどのくらいの頻度で書いているか.

3. 大学の必修英語授業を終えて，学習者は，ライティング力が，どの程度伸びたと自己評価しているか.

そのほか,日本における「ライティングセンター」の役割の解明,「ライティング教師の意識」が東アジア各国でどのように異なるかを探ることも目的とした.

(2)コーパス班

学習者コーパスから見た東アジア EFL ライティングの言語的特徴の分析を目指した.

学習者コーパスは，学習者言語（中間言語）の言語的特徴や言語発達の過程を探る上で有用な言語資源である．本研究では,母語が異なっていても共通する（英語母語話者の言語使用とは異なる）言語的特徴があるのではないかという新しい視点に立ち,データ駆動型の言語分析を実施する.

具体的には,英語学習環境が類似している東アジア諸国の大学生が作成した英作文を収集したアジア圏国際英語学習者コーパス（International Corpus Network of Asian Learners of English: ICNALE）を使用し,香港,台湾,韓国,日本という４つの国・地域の英語学習者が同一の条件で産出した英作文に見られる共通の言語的特徴を以下の２つの分析手法を用いて解明する．ICNALE には，比較対照となる英語母語話者コーパスも用意されている.

1. 各英語学習者グループと英語母語話者グループとの比較
2. 英語学習者グループ間の相互比較

３．研究の方法

(1)実態調査班

「学生アンケート」に関しては,東アジア 4 つの国・地域（日本・台湾・韓国・香港）の国立・私立大学に在籍する大学生（N =1,356 名）を対象に，質問紙調査を実施した．内訳は, 日本 779 名, 台湾 205 名, 韓国 253 名, 香港 119 名であった.

(2) コーパス班

本研究グループでは,アジア圏の英語学習者が同一の条件で作成した英文エッセイを大規模に収集した ICNALE (http://language.sakura.ne.jp/icnale/) の中から,香港・台湾・韓国・日本の英語学習者の作文データを抽出して分析することにより，1.母語や英語習熟度による言語使用上の類似点と相違点，2.ライティング課題文のライティング・プロンプトが英語学習者の言語使用に与える影響, 3.ライティング・プロンプトが英語学習者の語彙使用に与える影響（特に

「語彙の反復使用」）を明らかにすることを目的とした．

４．研究成果

(1) 実態調査班

研究課題 1, 2, 3 それぞれについて，どのような結果が得られたかを述べる．

研究課題 1 の「高校の英語授業で，どんな英文をどのくらいの頻度で書いているか（①長さ，②エクササイズの種類，③ジャンル）」については，全体として，香港と台湾は，韓国と日本に比べると，「書く活動を経験した」と認識している学習者が多いことが分かった．共通点として，台湾，韓国，日本では，パラグラフを用いたまとまった量の文章というよりは，文脈のない単文（エクササイズや英訳など）レベルの活動が頻繁に行われていたという点が示唆された．一方，香港では，これとは逆の傾向が見られ，単文レベルのエクササイズというよりは，パラグラフを用いたライティング活動の方が頻繁に行われていたことが明らかになった．さらに，「高校の英語の授業内でどのようなタイプの英文（ジャンル）を経験したかについての学習者の認識」の結果は図１に表されている．全体として，まず，香港は，他の３カ国と比べると，扱うジャンルの種類が多岐に亘っていることがうかがえる．エッセイや要約文などの学術的・二次的なジャンル（secondary genres）のみならず，手紙文や物語などの日常的・一次的なジャンル（primary genres）も扱われている点は興味深い．東アジア４カ国に共通する点として，エッセイや要約文が高校の英語授業での主要なジャンルであることがうかがえる．一方，日本は，経験したジャンルの種類に加えて，その量においても，他国と比べると平均値が顕著に低く，ライティング活動が軽視されている可能性が示唆される．

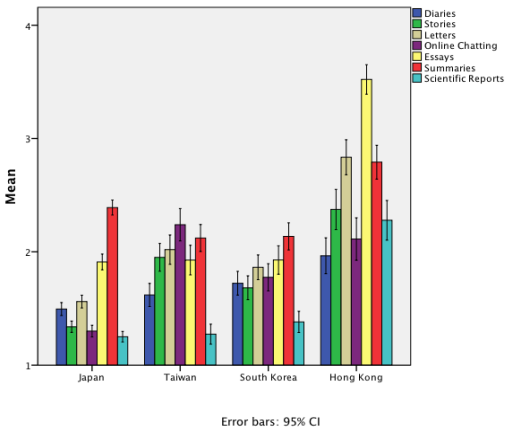

図１　高校の英語授業において経験したライティング活動（ジャンル）

研究課題 2 の「大学の英語授業で，どんな英文をどのくらいの頻度で書いているか（①長さ，②ジャンル）」についてであるが，台湾，韓国，日本の高校では，文脈のない単文レベルのエクササイズに時間が割かれる傾向が見られたが，大学では，パラグラフを取り入れたまとまった量の英文を書く活動が頻繁に行われるようになる傾向が見られる結果となった．しかし，大学に入っても，文脈のない単文レベルのエクササイズの活動は減ることはなく，パラグラフ・ライティングとほぼ同程度の頻度で行われている可能性があることが分かった．一方，香港では，大学になると，単文レベルのエクササイズは，あまり行われておらず，二パラグラフ以上のまとまった量の英文を書く活動の方に時間が割かれている傾向がうかがえた．

図２は，大学の英語の授業内でどのようなタイプの英文（ジャンル）を経験したかについての学習者の認識を表している．まず，東アジア４カ国・地域に共通する点として，エッセイと要約文という二つの学術的・二次的ジャンルが大学の英語授業の主要なジャンルである傾向がうかがえる．台湾では，オンライン上でのチャットというジャンルが最も頻度の高いジャンルとなっており，読み手や目的を意識したコミュニカティブなライティング活動が授業に組み込まれている可能性が示唆される．一方，日本では，経験したジャンルの種類に加えて，その量においても，他国と比べると平均値が顕著に低く，ライティング活動が高校の英語授業におけると同様，軽視されている可能性が示唆される．

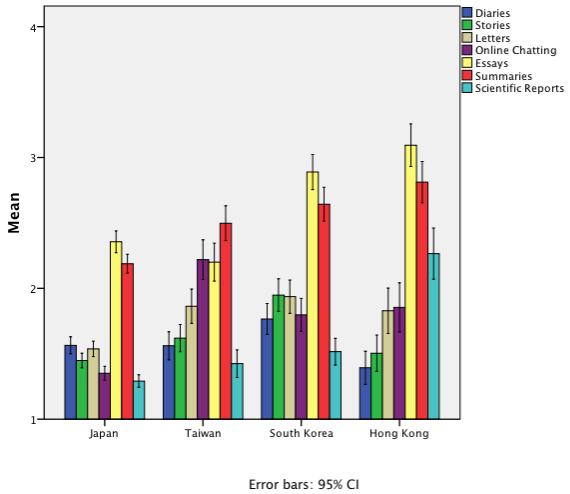

図２　大学の英語授業において経験したライティング活動（ジャンル）

研究課題 3 の「大学の必修英語授業を終えて，学習者は，ライティング力が，どの程度伸びたと自己評価しているか」であるが，　ここでの「ライティング力」は，次の四つのサブ・スキルから成るものとして定義された．「トピックセンテンスとサポートセンテンスを用いて効果的にパラグラフを構成する」，「正しい文法で英文を書く」，「読み手や目的など文脈に応じた適切な文体で英文を書く」，「外部文献を適切に引用し，自分の主張を支える」である．これら四つのサブ・スキルについて，回答者は，「非常にうまくできる」，「まあまあうまくできる」，

「あまりできない」,「全くできない」の四段階で自己評価することが求められた．結果としては,全体として，日本の学習者は，他の三か国・地域の学習者に比べて，どの項目においても低い評価をしている点は興味深い．その中でも特に,「読み手や目的など文脈に応じた適切な文体で英文を書く」というスキルが最も低い平均値となっており，形式–意味–機能のマッチングに困難を感じている学習者が一定数いる可能性が示唆される．

以上の結果から，東アジアの英語ライティング教育の実態について，問題点と課題を整理する．まず，本研究で明らかになった東アジアの英語ライティング教育の実態の背景には，二つの影響要因があることが示唆された．一つは，各国の言語教育政策，もう一つは，大学統一入学試験である．

現在の香港では,「両文三語」政策が推進されている.「両文三語」とは，中文・英語 で文書を読み書きができ，広東語・英語・普通話の三語を話せることを指す．この政策は，将来の香港を支える若者の教育現場に大きく反映されている．本研究で，香港の学習者のライティング経験が，量のみならずジャンルの種類においても，他国に比べて顕著に高かった背景には，この「両文三語」政策があることがうかがえる．

香港をのぞく東アジア３カ国・地域の英語ライティング教育は，大学統一入学試験の内容に影響を受けている可能性が考えられる．台湾は，高校の英語授業でライティング活動が行われる頻度が日本と韓国と比べて高いことが明らかになったが，この背景には，台湾の大学学科能力測験（The Joint College Entrance Examination, JCEE）の中で，ライティングの問題が出題されていることと関係があるのかもしれない．

一方，韓国の大学修学能力試験（College Scholastic Ability Test, CSAT）では,「リーディング」と「リスニング」の問題のみ，日本の大学入試センター試験（The National Center Test for University Admissions）は,「リーディング」,「リスニング」,「文法」,「発音」を扱っており，両国とも，大学統一入学試験に「ライティング」は入っていない．こうした現状が，両国の高校英語授業におけるライティング軽視の現状につながっている可能性がある．

このように，入学試験の内容がすなわち授業の内容を決めるという「ウォッシュバッグ効果（washback effect)」が起きていることが，現在の東アジア（日本，韓国，台湾）の英語教育と英語ライティング教育における問題点の一つであると言えるかもしれない．

「言語教育政策」,「言語能力測定」,「授業内容」という三つのファクターの関係性を今後どのように構築していくか．これが，英語教育全般のみならず，ライティング教育の改革においても鍵となる課題だと言える．

(2) コーパス班

本研究グループでは,アジア圏の英語学習者が同一の条件で作成した英文エッセイを大規模に収集した ICNALE (http://language.sakura.ne.jp/icnale/) の中から,香港・台湾・韓国・日本の英語学習者の作文データを抽出して分析することにより,1. 母語や英語習熟度による言語使用上の類似点と相違点， 2. ライティング課題文のライティング・プロンプトが英語学習者の言語使用に与える影響,3.ライティング・プロンプトが英語学習者の語彙使用に与える影響（特に「語彙の反復使用」）を明らかにした．

1.母語や英語習熟度による言語使用上の類似点と相違点

ICNALE に収録された香港,台湾,韓国,日本という 4 つの国・地域の英語学習者（大学生）が同一の条件で作成した英文エッセイを対象として，Biber (1988)が英語母語話者の話し言葉と書き言葉の分析に用いた 67 種類の言語項目のうち 58 の項目について使用頻度を調査した．さらに,統計的手法を用いることにより,これらの言語項目の使用（＝言語的特徴）における類似点と相違点を分析した．分析の結果，3 つのグループに分かれることが明らかになった．日本人英語学習者は,東アジアにおける他の英語学習者とは一線を画し，1 つのグループを構成し，特有の言語的特徴も明らかになった．具体的には,日本人英語学習者が偏用しがちな（過剰使用する）項目は「1 人称代名詞」,「現在形」といった話し言葉に特徴的なものであった．一方，あまり使用しない（過少使用する）項目は「限定形容詞」であることもわかった．

ICNALE には,英語母語話者による英文エッセイも収録されているため，英語母語話者との比較を行ったところ，英語母語話者は習熟度の高い英語学習者（特に香港の英語学習者）と言語使用において 1 つのグループを構成することがわかった．母語と英語習熟度の観点から言語使用をさらに分析を行ったところ，香港と日本の英語学習者は英語習熟度よりも母語による影響が大きく，台湾と韓国の英語学習者は母語よりも英語習熟度の影響が大きいことが示唆される結果を得た．

2.ライティング・プロンプトが英語学習者の言語使用に与える影響

ICNALE における 2 つのライティング・プロンプトが英語学習者の言語使用に与える影響を分析した．比較に用いた 58 種類の言語項目は，本科研においてこれまでも分析対象としてきた項目であり,語彙・文法・統語・談話など,言語使用の様々な側面に光を当てるものである．ランダムフォレスト機械学習法と多次元尺度法に基づく統計解析の結果,part-time job に関するエッセイでは，(a) third person pronouns, (b) infinitives, (c) attributive adjectives, (d) first person

pronouns が高頻度で使用されており，smoking に関するエッセイでは，(a) agentless passives, (b) necessity modals, (c) amplifiers, (d) analytic negation, (e) place adverbials, (f) other total nouns が高頻度で使用されていることが明らかになった．これらの言語項目の使用は,プロンプトの影響が反映された可能性がある．Sinclair (1991) が述べているように，複数のコーパスを比較した結果はコーパスそのものに依存するものであり,さらには Buttery & Caines (2012) で示されているように,異なるタスクやトピックに基づくテクストでは言語使用が有意に異なる．これらの結果により，学習者コーパスを構築する際には，プロンプトの長さや使用語彙の難度だけでなく，使用する文法項目や統語構造も統制する必要がある．もしくは，プロンプトの差を勘案した上で比較可能な統計モデルを用いる必要がある．

3.ライティング・プロンプトが英語学習者の語彙使用に与える影響

これまでの第二言語ライティング研究において，英語学習者が作成する英文エッセイにはライティング課題文に含まれる語彙が頻繁に使用されることが報告されている．こうした英語学習者による語彙使用,しかもその反復使用がどの程度に及ぶのかを詳細に分析することで，今後の英語ライティング指導への示唆が得られると判断した．

具体的には,ICNALE のライティング・プロンプトに含まれる単語列（3 つ以上の連続する単語で構成される単語列）が香港,台湾,韓国,日本の英語学習者と英語母語話者の英文エッセイにどのくらいの比率で使用されているのかを調査した．分析に際して，ICNALE における 2 つのライティング・プロンプトに対してそれぞれ作成された英文エッセイから,分析対象とする単語列を抽出し,各英文エッセイにおける占有率を自動計算するツールを開発した．

4 つの国・地域の英語学習者と英語母語話者による英文エッセイにおける上記占有率を比較したところ，ICNALE の 2 つのライティング・プロンプトのいずれの場合においても，英語学習者は英語母語話者よりも占有率が高いこと,英語学習者のなかでは日本人による占有率が最も高いことが明らかになった．

そのほか，実態調査班としては,中学校・高校・大学で教える教員対象の意識調査を日本,韓国,台湾の 3 国・地域にまたがって実施し，3 国・地域間の意識の違いの一端が明らかになった． この 3 国・地域の中での共通点として，教員は 4 技能のうち,ライティングの指導が最も重要度が低いという点である.その中では,台湾の教員が最もライティングについて積極的に考えており,これは,大学学科能力測験（The Joint College Entrance Examination, JCEE）の中で，ライティングの問題が出題されていることと関連が深いと考えられる.

(3)その他の結果

・日本におけるライティングセンター研究

ライティングセンターの役割についても考察を深めた。日本におけるライティングセンターに負わされている期待は,アメリカのそれとは異なることが示された.

・日本語教育からの視点

年に数回開催した科研の会議において、日本語教育からも適宜助言をもらった。

・国際シンポジウムの開催

国際シンポジウムを2013年と2015年に開催し,台湾，韓国，香港から研究者を招き,それぞれの国・地域のライティング教育の現状を報告しあうとともに,フロアを交えて活発な意見交換を行った． 2 回とも資料集を刊行した。

・4 年間の成果は,各自年に数回海外を含め,積極的に学会に発表するとともに論文にまとめ,そして，集大成として『*EFL Writing in East Asia: Practice, Perception and Perspectives*』を発刊した.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①成田真澄(2015). 英語母語話者が産出した意見文における語彙特性–大学生と社会人が使用する４単語連鎖の差異–,東京国際大学論叢–言語コミュニケーション学部編,査読無，vol.11, pp.9-21.

②Abe, M.(2014). Frequency change patterns across proficiency levels in Japanese EFL learner speech, *Journal of Applied Language Studies, Special issue on "Learner language and learner corpora"*, 査読有, vol.8, No.3, pp.85-96.

③Kobayashi, Y. & Abe, M.(2014). A machine learning approach to the effects of writing task prompts, *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, 査読有, vol.2, pp.163-175.

④ Yasuda, S.(2014). EFL writing in Japanese instructional contexts: Present perspectives and future directives, *Asian EFL Journal*, 査読有, vol.16, pp.155-202.

⑤保田幸子・大井恭子・板津木綿子(2014).日本の高等教育における英語ライティング指導の実態調査,*JABAET Journal*,査読有,vol.18,pp.51-71

⑥Abe, M., Kobayashi, Y., & Narita, M.(2013). Using multivariate statistical techniques to analyze the writing of East Asian learners of English, *Learner corpus studies in Asia and the world*, 査読有, vol.1, pp.55-65

⑦小林雄一郎・阿部真理子・成田真澄(2013).書き手の習熟度と母語が第 2 言語ライティングに与える影響,じんもんこん，査読有, pp.89-96

〔学会発表〕（計 21 件）

① Abe, M. & Kobayashi, Y., Grammatical, morphological, and lexical errors between careful

and vernacular styles,Language in Focus 2016,**イスタンブール（トルコ）**, 2016.3.10

②Kobayashi, Y., Comparing native and non-native English through significance tests and effects sizes, Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, **高麗大学（韓国）**, 2015.12.5

③Narita, M., Native Essays as Reference Data in Learner Language Research, Symposium on Second Language Writing , **オークランド工科大学（ニュージーランド）**, 2015.11.21

④Kobayashi, Y., Investigating meta discourse markers in Asian Englishes: A corpus-based approach, Symposium on Second Language Writing, **オークランド工科大学（ニュージーランド）**, 2015.11.19

⑤Yasuda, S. & Oi, K., EFL Writing Instruction in East Asia: Policy, Practice and Future Directions, The 2nd International Symposium EFL Writing in East Asia, **東京大学（東京都）**, 2015.10.31

⑥**大井恭子**,EFL **ライティング教育に関する中学・高校教師の意識調査—日本・韓国・台湾の** 3 **国間比較から見えてくるもの—**,**全国英語教育学会**,**熊本学園大学（熊本県）**,2015.8.23

⑦Narita, M., Abe, M.& Kobayashi, Y., Effects of a Writing Prompt on L2 Learners' Essays, Corpus Linguistics 2015, **ランカスター大学（英国）**, 2015.7.21

⑧Yasuda, S., Issues and challenges in teaching and learning EFL writing: A cross-national survey, American Association of Applied Linguistics, **トロント（カナダ）**, 2015.3.22

⑨**保田幸子**,**日本，台湾，韓国，香港における英語ライティング教育実態調査**,**千葉大学英語教育学会**,**千葉大学（千葉）**,2015.3.15

⑩Narita, M., Lexical Bundles in Native English Essays, The 7th Symposium on Writing Centers in Asia , **東京国際大学（日本）**, 2015.3.7

⑪Kobayashi, Y., A corpus-based contrastive analysis of L2 metadiscourse, Language in Focus, **リキア・ロッジ（トルコ）**, 2015.3.6

⑫Oi, K. & Beverley, H., Comparison of Japanese secondary-level English teachers' beliefs and Korean secondary-level English teachers' beliefs about teaching EFL writing in their respective countries, Conference on Writing Research, **アムステルダム（オランダ）**, 2014.8.28

⑬Oi, K., Developing argumentation skills in English writing classes, The 17th JASMEE, **東京都**, 2014.7.19

⑭Kobayashi, Y. & Abe, M., A machine learning approach to the effects of writing task prompts, Learner Corpus Studies in Asia and the World, **神戸大学（兵庫県）**, 2014.5.31

⑮**大井恭子**,**日本の中学高校生の書く力はこの** 10 **年間でどのように変化したか**,**日英英語教育学会**,**東京理科大学（東京都）**, 2014.3.1

⑯**小林雄一郎・阿部真理子・成田真澄**,**書き手の習熟度と母語が第** 2 **言語ライティングに与える影響**,**じんもんこん** 2013,**京都大学（京都府）**, 2013.12.13

⑰Abe, M., Kobayashi, Y., & Narita, M., Linguistic features discriminating between native English speakers and East Asian learner groups with different proficiency levels, Learner Corpus Research 2013, **ベルゲン（ノルウェー）**, 2013.9.28

⑱**田畑光義・大井恭子**,**内省記述から見る中学生ライティングのつまずきと課題—千葉県内の中学生を対象にした実態調査から—**,**関東甲信越英語教育学会**,**松本歯科大学（長野県）**,2013.8.17

⑲**板津木綿子・保田幸子・大井恭子**,**学生アンケートによる日本の英語ライティング教育の実 態調査 —大学入学前・入学後を比較して—**,**全国英語教育学会**,**北星学園大学（北海道）**2013.8.11

⑳Abe, M., Using multivariate statistical techniques to analyze development of oral proficiency, American Association for Applied Linguistics 2013, **ダラス（アメリカ合衆国）**, 2013.3.16

㉑**大井恭子・板津木綿子・保田幸子**,**大学におけるライティング教育のあり方：実態調査報告**,**九州英語教育学会**,**長崎外国語大学（長崎県）**,2012.12.8

〔図書〕（計 1 件）

①Oi, K. (Ed) et al.(2016). **勝美印刷**, *EFL Writing in East Asia: Practice, Perception and Perspectives*, 261

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等 なし

6．研究組織

(1)研究代表者

大井　恭子（OI, Kyoko）
清泉女子大学・文学部・教授
研究者番号：70176816

(2)研究分担者

・田中　真理（TANAKA, Mari）
名古屋外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：20217079

・成田　真澄（NARITA, Masumi）
東京国際大学・国際コミュニケーション学部・教授
研究者番号：50383162

・阿部　真理子（ABE, Mariko）
中央大学・理工学部・教授
研究者番号：90381425

・保田　幸子（YASUDA, Sachiko）
九州大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：60386703

・板津　木綿子（ITATSU, Yuko）
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：80512334

・ホーン・ベバリー（HORNE, Beverley）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：80595786

・小林　雄一郎（KOBAYASHI, Yuichiro）
東洋大学・社会学部・助教
研究者番号：00725666